

文化祭の寓意

夏井高人

[初出]白聖編集委員会編「白聖第 21 号」(岩手県立盛岡第一高等学校生徒会, 昭和 49 年 3 月発行) 18 頁

「久しぶりですなァ。」

「そうですか？」

「絶対そうだ。」

「その証拠は？」

「そんなものは必要ない。事実としてそれが存在したということは誰の目にも明らかではないか。」

「私にはそれは通用しない。何故なら私は単に耳で聞いただけなのだ。そんなものは既に底知れぬ宇宙の深淵へと転がり落ちてしまった。君の目に映るのは無人の神殿。小部屋に漂う煙草の如くだ。」

「君にはその栄光と神秘が見えないのだ。」

「失敬な。神秘などという言葉がそう簡単に使うべきではない。それは天と地の間に広がる無限の大洋、野の葡萄の粒に群がる無数の霧滴。即ち真の人類の楔となるべきものである。」

「君は詩人なのか。」

「否 哲人である。」

「ならば私にはもう言うべき言葉は何も残っていない。申し訳にこう記すのみだ—昨日の金崗即ち今日の灰陵となり、田圃山野に化して久しからず。我思うに、此れ四季の変転に似たりと。壊して後、又凝積して後又裂するなり—。」

「成程。しかし、君は結局虚空に陥らざるを得ない。誰も知らねばなおさらだ。」

「何をいおうともその故に君とて同じ運命にあるのさ。」